

教会暦と聖書の流れ

先週読まれたマルコ 9 章 30-37 節で、イエスは 2 回目の受難予告をし、ご自分の十字架の道に弟子たちを招きました。先週の箇所では「仕える者になる」「子どもの一人を受け入れる」ということが言われていましたが、それに続くきょうの箇所でも、イエスに従う弟子たちの生き方とはどういうものが示されると考えたらよいでしょう。つまり、ここには、弟子たちの生き方についての教えだけでなく、イエスご自身の十字架の道がどのようなものであるかということも示されていると言えそうです。

福音のヒント

(1) 「ヨハネ」はもちろん、ヤコブの兄弟である弟子のヨハネです。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました」(38節)。イエスの名を使って悪霊を追い出す、しかし、自分たちとは歩みを共にしない、これはイエスの地上での活動の時代よりも、後の教会の時代になってからのほうがありそうな問題です。

イエスは弟子たちの狭いグループ意識を批判します。「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである」という言葉はイエスの非常に広い、開かれた心を表しています。これは、イエスが十字架に向かう中で、敵意や憎しみを受け止め、すべての人を愛し続けた姿とつながります。ルカ9章50節にも同様の言葉があります。

一方、マタイ12章30節とルカ11章23節には、まるで正反対のような、「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている」(マタイ)という言葉もあります。これらの箇所は「悪霊」につくか「神の霊」につくか、の二者択一を迫る文脈なので、厳しい言葉になっているようです。

(2) マルコ9章41節「キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける」という言葉も、狭いグループ意識に凝り固まらないイエスの心を示しています。

これとよく似た言葉をマタイは違う文脈の中で伝えています。「わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」(マタイ10章42節)。マタイのほうは、弟子たちを派遣するにあたって弟子たちが迫害を受けることを予告する、という文脈の中でのことですから、マタイの「小さな者」は迫害されているキリスト者のことだと言えます。このマルコの箇所の「あなたがた」にも「圧迫され、苦しみの中にあるキリスト者であるあなたがた」というイメージがあるのかもしれませんが、なぜなら、続く42節には「わたしを信じるこれらの小さな者」という言



葉があるからです。だとすれば、41節と42節はどちらも苦しむ人々への態度のこととして、なんらかのつながりがあると考えられるでしょう。

(3) しかし、きょうの箇所全体を一つの教えとして考えることは難しいようです。37節の「子ども」(先週の福音)や41節の「キリストの弟子」と42節の「小さな者」はイメージとしてつながっています。42節の「つまずかせる」と43、45、47節の「つまずかせる」は言葉の上でつながっています。しかし、それぞれの文が内容的にも関連があるとは考えられません。さらに、きょうの箇所の後、50節までの箇所でも「地獄」「火」「塩」という言葉でつながっているだけで、内容的なつながりは見いだすことができません。

どうしてこのようなことがあるのでしょうか？ イエスの言葉は最初から文字に書きとめられたのではなく、口伝えで語り継がれていきました。人々の記憶に頼っていたので、このように、言葉やイメージ、あるいは似ている文章構造によって短いイエスの言葉が結び合わされ、記憶しやすい形で伝えられていったのだと考えられるのです。もちろん、内容的にまったく無関係な言葉と考えることはできません。これらの言葉全体は、イエスの弟子にふさわしい生き方を指し示す言葉として大切に伝えられていったのでしょう。

(4) 「つまずかせる」は本来、「人の歩く道に罫を仕掛ける、道に障害物を置く」という意味です。「罪に誘う、神への道から引き離す」という意味に受け取ればよいでしょう。ただし、42節の「つまずかせる者は・・・」には、もっと一般的に「小さな者を軽んじ、小さな者に悪いことをしないように」という警告の言葉だと受け取ったほうがよいでしょう。イエスの目はいつも「小さな者」に注がれていました。同じように「小さな者」を大切にすることが弟子たちに求められるのです。

43節以降の「手があなたをつまずかせる」「片方の足が・・・」「片方の目が・・・」は非常に強い言い方です。実際に手や足や目が人に罪を犯させるものではありませんし、もしそうだとでも手や足や目を取り去ることは考えられません。これは明らかに誇張された表現で、「自分をつまずかせるもの」つまり「自分を神から引き離し、罪に誘うもの」を一切捨て去るようという強い警告です。「地獄」と「命・神の国」の対比も警告を強めるためですし、同じような警告が3度繰り返されるのも、この警告の厳しさをより強めています。

ところで、新共同訳聖書のこの箇所を見ると、44、46節は省かれていて、そこに短剣のような記号「†」が付けられています。これは新共同訳がもとにしたギリシア語聖書(底本)で省かれている箇所の印です。写本によってはこの2箇所には「地獄では蛆(うじ)が尽きることも、火が消えることもない」という48節と同じ言葉があるのですが、現代の学者は本来のマルコ福音書になかったと考えています。写本が書き写されていく中で、3つの警告の形を統一するために付け加えられていったようです(なお、この言葉はイザヤ66章24節の引用です)。とにかくここで、わたしたちに対して、罪から絶縁するという厳しさが求められていることは確かです。ただし、それは、日常の小さな罪から離れるということよりも、神と人への愛からわたしたちを引き離す決定的な罪の誘惑(=つまずき)のことと考えてもよいのではないのでしょうか？ もし、43節以下が42節と内容的なつながりがあるとするならば、「小さな者を軽視し、小さな者の歩む道を邪魔する」という心のあり方こそが、もっとも重大な罪の問題だということになるからです。